



江戸川大学学生新聞

THE EDOGAWA TIMES

VOL.8 #14
2018年10月31日(水)

取材／編集：学生記者クラブ
発行：江戸川大学企画総務課

フィリピンの学生と 江戸川大学で交流会開催



①土屋ゼミの活動について説明を受けるフィリピンの学生たち。②自国について説明するフィリピンの学生。③日本語の説明を理解して満面の笑顔。④フィリピンについて質問する土屋ゼミの学生。⑤意見を述べるフィリピンの学生。⑥説明の補足をする土屋先生。⑦プレゼントのポーズ。⑧みんなそろって笑顔で記念撮影。JENESYSはJapan-East Asia Network of Exchange for Students and Youthsの略称で、21世紀東アジア青少年大交流計画のこと。



10月5日、江戸川大学で、フィリピンの大学生・大学院生17名と、社会学部現代社会学科土屋薫教授のゼミ生8名、そしてメディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科の学生1名が交流会を行った。(取材・写真 増田朱音)

今回、江戸川大学に訪れたのは、日本政府が推進している国際交流事業の一環である「対日理解促進交流プログラム」に参加したフィリピンの大学生・大学院生17名の訪日団だ。このプログラムは日本と

他国の交流基盤を作ること、を目的に行われている。日本語を学び、交流を通じて日本の歴史や文化、社会などを体験・理解し、日本の魅力を自国の人伝えてもらうことを期待している。今後の両国関係をより良いものにするために、日本文化を理解するプログラムが

沢山用意された。その中の一つが学校交流だ。今回、流山市でまちづくり事業を行っている株式会社WaCreationがこの事業の委託を受けて、流山市内の大学である江戸川大学に学校交流の企画を依頼した。

交流会は、8人から11人の3グループに分かれて行われた。最初に土屋ゼミの学生が、フィールドワークの成果(流山、日野、青森の事例)について、スライドを用いて日本語で説明した。その後、日本語がわかるフィリピンの学生や英語が話せる江戸川大学生が翻訳してコミュニケーションをとっていた。

スライドによる説明が終わった後は、フィリピンの学生がインターネットやホワイトボードを使い自国や学生の地元の紹介を行った。

江戸川大学生からは、「フィリピンの食べ物でおいしいものはなにかなど」質問が挙がり、会話が弾んだ。それがきっかけで、SNSのアカウントを教えあったり、写真を撮りあったりしていた。交流会の終わりにはフィリピンの学生から、イロコス地方の伝統工芸品である、手織りのポーチがプレゼントされ、感謝の気持ちが伝えられた。

参加したフィリピンの学生は、「江戸川大学の学生さんはとても親切で、フレンドリーな人が多かった。拙い日本語でも聞いてくれたのでコミュニケーションをとることができた」と喜んでた。

土屋ゼミ3年の伊勢康平さんは「スライドを作るとき、翻訳しやすいように簡単な日本語を使うよう心がけたが、それでもうまく伝わらないことがあってコミュニケーションの難しさを感じた」と話した。

マス・コミュニケーション学科3年の今成藍子さんは「文化の違いはあるけれども、江戸川大学で学んでいることに興味を持ってくれて嬉しかった。少しずつではあるけれども、お互いの文化を理解しあえたのがよかったと思う」と語った。日本とフィリピンの間の、小さいながらも友好に向けての一步に繋がる交流会となった。